

ゆらぎながら生きること
- 村上春樹『スプートニクの恋人』をめぐって -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
大野 妙子

「自分とは何か」といった問いは人間の根本的なものであり、答えを明確に示すことは難しい。幼い頃から小学校、中学、高校、大学と、受験、進学、就職を含めさまざまな道を通り私たちは生きている。時に迷いつつ、ゆれ動きながらも多様な道を歩む人びとの姿をみると、生きる本質は「ゆらくこと」から捉えられるのではないかと考えられる。ゆらくことに関しては、青年のモラトリアムにおけるゆらぎ性が挙げられる。青年の自己への問いに関する不安や葛藤等を心がゆれ動く様子としてみた時、現代の青年の新たな心理特性を紐解けると思われる。ゆらぎは自然界に必ず存在し人びとに安らぎや快適性を与えるものとする見方がある。本論文では肯定的な捉え方でゆらぎをみることから、青年が自分を見つめることに向き合い、ゆれ動き生きていくことについて考察した。ここでは、青年が自分と向き合うことに関する概念としてアイデンティティとモラトリアムに着目し、村上春樹の小説『スプートニクの恋人』をとりあげ検討した。

この作品では、青年の時期にある登場人物たちが自分と他者や様々な物事とふれあいゆれ動く姿をとおり、ゆらぎながら生活する姿が描かれている。彼らの様子を追い、青年のゆらぎを考えた。第1章で青年のゆらぎに関する理論を概観し、第2章で小説の登場人物の言葉や行動等からゆらぎに関する見解や姿勢を考察した。最後に第3章で、ゆらぎを肯定的に生きるうえで青年の自分への問いをどのように捉えていけるかを検討した。

登場人物は皆、一度はゆれ動く自分達に戸惑い否定しつつまたゆらぎ続けた。自分を問うたり人とのかかわりあいのなか、改めてゆらく自分と向き合えた様子が窺える。ゆらぎを生きるうえで彼らは、決して自分の源泉にある信念を無理に曲げることはせず、むしろそれを基軸に生きている。どのあり方にも確固たるものはなく、人間はつねに矛盾を抱え存在する。めまぐるしく変わりゆく社会の様相に従い、生き方を問う形も多様化している。私たちは確固たる自分をもつか、色とりどりに変化するかといった生き方でしか、この混沌とした世界の様相に対応しえないようにも思える。しかし、自分をどのように生きるかを考えた時、そこに一定のこたえはない。こたえのない問いを抱える自分を生きること、それは、自分そのままを見つめられるかどうかにかかっている。多様なあり方が求められ続ける現代だからこそ、根本的な自分の存在をふり返ることで、アイデンティティやモラトリアムのあり方をより柔軟性をもって捉える必要がある。自分への問いに囚われなくなったその時はじめてゆらぎをそのまま生きることが出来る。物語の登場人物たちのように、他者とかかわり移りゆくものを感じつつ関係性を継続させながら生活していく。自身にゆらぎない基軸をもち得る柔軟性をももち合せながら。そのようなあり方がゆらぎを生きていくことであるといえる。